

二つの『護園蔵書目録』

—— 荻生家の蔵書変遷について ——

吉川 裕

要旨

『護園蔵書目録』は荻生徂徠の私塾「護園」の蔵書目録である。従来は静嘉堂文庫所蔵のものだけが知られていたが、近年の調査によって平戸藩藩主だった松浦静山所蔵の『護園蔵書目録』の存在が明らかになった。奥付には静山の書込があり、この蔵書目録は天明六（一七八六）年の冬に書写されたものであること、持ち主は大和郡山藩藩主柳沢保光に仕えた儒者であり、荻生家三代目当主荻生鳳鳴だということが判明した。そこで本稿は静嘉堂文庫所蔵の『護園蔵書目録』（静嘉堂本）と松浦史料博物館所蔵の『護園蔵書目録』（平戸本）とを比較検討し、それぞれの特徴と成立年代、成立順に関する簡単な整理を行うことで、荻生家の蔵書変遷と荻生鳳鳴の動向の解明を目的とした。

検討した結果、静嘉堂本は少なくとも一七七一年以降の成立であり、平戸本は一七八六年以前の成立であることがわかった。また平戸本では徂徠の『弁名』『弁道』等の代表作が目録に加わったほか、徂徠の高弟たちの著作が新たに追加されていたことを明らかにした。この時期になってようやく彼らの著作を目録に加えようとした背景は現在のところ不明だが、二つの蔵書目録の合間、一七七六年に徂徠学を代表する学者が一年で計四人も没し、弱体化した「護園」を立て直そうとする意図があったのではないだろうか。今後はより詳細な蔵書分析と、同時代の徂徠学者の言説を明らかにしていくことが必要である。

『護園蔵書目録』という書物がある。これはかつて古文辞学とよばれる学問的方法論を駆使して経世済民を第一とする政治的な立場から儒学の再検討を行い、日本の思想界を一変させた思想家、荻生徂徠（二六六〇—一七二八）に由来する蔵書目録である。柳沢吉保（一六五九—一七一一）の下で儒者として仕えていた徂徠であったが、後ろ盾であった吉保の失脚といった政治的状況から柳沢家を致仕すると、日本橋茅場町に私塾「護園」を構えて弟子の教育にあたりながら学問に専念し、最終的にはそれまでに類を見ない学問体系、徂徠学を作り上げた。『護園蔵書目録』はこの徂徠の私塾「護園」の名前を冠した蔵書目録であり、徂徠と深い関わりを持っている書物である。徂徠や徂徠の弟子達の往年の姿を伝える『護園雑話』には「徂翁〔注―徂徠〕外より書をかりに来たれる人あれば其俣かされたり。若し出しやう遅ければ殊の外怒られ、吾が書を見たきも人の見たきも同じことなりと云はれし由⁽¹⁾」と徂徠生前から書籍の活発な貸し借りがあったことを示すエピソードが残されている。目録を作っておく必要も当然あっただろう。

日本思想史という研究分野では、ある思想家のテキストを読み込んで内在的に理解した上で再構成を行い、歴史的・同時代的な問題の枠組みに位置づける方法が、様々な意見はあるにせよ一般的である。徂徠研究の場合も同様で、徂徠の名著や漢詩文を精密に読解することで、徂徠の思想を明らかにし、近世日本思想史上あるいは近代日本思想史への連続性や断絶の中で果たした役割を考察するのがオーソドックスな研究と言えるだろう。いずれの著述も互いに絡み合っているが、徂徠の思想を構成しているのだが、端的に述べるならば儒学や学問的方法論についてなら『学則』『弁道』『弁名』や『論語徴』、政治思想に関するものなら『政談』『太平策』、詩文に関するものなら『徂徠集』、兵学に関するもの

のなら『鈐録』といった具合である。これらを詳細に分析した研究はいずれも高い水準に達しており、今日においても優れた研究が陸続と生産されている。⁽²⁾

その中で、本稿はこれまで荻生徂徠研究史ではほとんど取り上げられてこなかった『護園蔵書目録』の分析を通じて、これまでとは少し違った角度から「荻生徂徠」に迫りたいと考えている。書物に何がどのように書かれているのかだけを問題にするのではなく、その内容はどのような社会的制度的物質的条件の下で成立したのか、あるいはどのような書物をどの程度所有していたのかといったような視点から、蔵書の持ち主の思想的な傾向を測ろうとする研究は一九九〇年代の半ばから始めてきているが、本稿はこのような蔵書分析を行うことで、『護園蔵書目録』の持ち主の思想や行為を明らかにしていくことが目的である。

論を進める前に注意しておきたいのは、この『護園蔵書目録』は徂徠個人の蔵書目録ではないという点である。『護園蔵書目録』を詳細に見ていくと、明らかに徂徠没後の刊行物が含まれており、徂徠生前に作成されたものとは考えにくい。一方で徂徠存命時に輸入・刊行された書籍を多く含むことから、徂徠が基礎をつくり、子孫に継承されていた蔵書を、ある時点で目録化したものとして捉えるのが妥当であろう。そのため本稿ではこの蔵書目録を私塾「護園」、言い換えれば徂徠だけでなく徂徠の後を継いだ荻生金谷（一七〇三〜一七七六）以降の子孫を含めた「荻生家」という共同体の中で成立したものと⁽⁴⁾して考察を進めていく。

この『護園蔵書目録』はこれまで静嘉堂文庫が所蔵する写本のみが知られていた（以下、静嘉堂文庫所蔵の写本『護園蔵書目録』を静嘉堂本と呼称する）。この静嘉堂本を用いた研究がほとんど存在しないのは前述の通りだが、その一方で静嘉堂本は、いつ、誰が、どのような状況で書写したものなのかが明らかではなく、そもそも書写された原『護園蔵書目録』が本当に荻生家の蔵書目録なのかどうかすら、書名以外に判断する材料が見当たらない。そういう意味

では、資料として取り扱うにはやや抵抗もあっただろう。

しかし近年になって共同研究「山鹿素行関連文献の基礎的研究」の調査により、平戸藩藩主、松浦静山（一七六〇～一八四二）が所蔵していた『護園蔵書目録』を得ることができた（以下、松浦史料博物館所蔵の写本『護園蔵書目録』を平戸本と呼称する）。当時より好学の大名として知られた静山の蔵書であり、徂徠の子孫が仕えていた大和郡山藩から借り受けたことを示す静山の書込があることから、『護園蔵書目録』はやはり荻生家ゆかりのものであるとよいだろう。ただ、同じ『護園蔵書目録』とはいえ静嘉堂本と平戸本には見逃しがたい内容的・時間的な差異も存在する。この二つを比較検討することで、これまで知られてこなかった荻生家の蔵書傾向や変遷の有様を明らかにできるはずである。

比較検討して蔵書傾向を知るためには、まず二つの『護園蔵書目録』がそれぞれどのようなもので、どちらがいつ頃に成立したのか、基礎的な事項を明らかにしておく必要がある。そのため、次節ではまず静嘉堂本と平戸本の特徴を挙げ、次に蔵書内容の検討を通しておよその成立年代と成立順とを考察し、静嘉堂本から平戸本への順であることを示す。最後に徂徠学派関係の書籍の増減を比較検討し、荻生家の蔵書変遷とその意味について考察をすすめる。

二、静嘉堂本と平戸本の特徴

（一）静嘉堂本の特徴

まずは静嘉堂本の特徴から挙げていく。外題は「護園蔵書目録 全」。記録された書物はおよそ九三四点。原本の成立年、並びに原本が書写された時期、筆写者に関する記述は見あたらないため現時点では不明である。内容やいろは

順で分類される形式の蔵書目録と違い、静嘉堂本は書籍を収蔵した箱（書匣あるいは書櫃）ごとに目録化する形式を採用している。それぞれの箱には通し番号が振られており、一号から五十五号（四十六から五十三のみ番と表記）と、官本目録第一号から第十六号とで構成され、蔵書が号ごとに順番に記載された。蔵書の大半は漢籍で占められているが、漢籍を集めた箱にまぎって和書を集めた箱もある。具体的には第三十七号、第三十九号、第四十号は和書のみ。第四十七番には伊藤仁斎や東涯の著作、第四十八番には徂徠の『徂徠詩文集』『護園隨筆』とともに種々の漢籍が入り交じっている。

すべてにはないが漢籍については著者名と冊数等を書籍名の下にそれぞれ記載してある。第一号には十三経、第二号（第三号）には『文苑英華』、第四号には『陳眉公秘笈』が収められているが、大部であるため紙幅の都合上、第五号から第十一号の目録を参考までに掲げよう。

表① 静嘉堂本			
号数	書名	著者	卷数
第五号	資治通鑑	温公	九十本 二百九十四卷
	目録	同上	二十本 三十卷
	考異	同上	四本 三十卷
	釈文弁誤	胡三省	四本 十二卷
	甲子会紀	薛应旂	四本 五卷
	宋元通鑑	同上	三十六本 百五十七卷
六編合百五十八本五百二十八卷			
第六号	後漢書	范曄	三十四本 百三十一卷
	皇華集	朝鮮	二本 二卷
第七号	晋書	太宗皇帝百三十卷 目録一卷 音又三卷	四帙五十三本百三十四卷
第八号	宋書	沈約	四帙 四十五本 百一卷
第九号	南齊書	蕭子顯	二帙二十一本六十一卷
	梁書	姚思廉	一帙 十五本五十七卷
	陳書	同上	一帙 十三本三十七卷
第十号	明史紀事本末	谷应泰	二帙
	明通紀	陳建	二帙
	名山蔵	何喬遠	三十本
第十一号	通典	杜佑君卿	五十二冊

一般的に書箱は箱の上方から前面にかけて書名を書き入れて使用されるが、静嘉堂本の原本がつくられる際はその部分をそのまま目録化したものと推測される。『護園雑話』にも同様のことが記されており、当時の状況とよく符合している。

竹溪は活気の人なり。徠翁の蟲干の時いつも竹溪手伝にきたり。〔中略〕 又た晒書の時笈中に折節其書籍なく、名ばかり蓋にしるしてあるとて、ない書籍を記して置くは益なきことなりとて消してしまったり。徠翁是れを見⁽⁵⁾て、これは迷惑なこと、折節他に借して置きしなり、必ずないのではなしとて笑はれしことありとぞ。

徠翁が門人である三浦竹溪（一六八九〜一七五六）と蔵書の虫干しをした際のエピソードである。ここから、徠翁は保管してある書籍の名前を箱のふたに書き記しておき、記録としていたことがうかがえる。何らかの理由で手元にならぬ書籍であっても、書き記しておくことで目録代わりになっていたのだろう。例えば第三十号の箱に収められた徐文長『振雅雲牋』は「九本内四之巻焼失」、第三十三号の箱に収められた『荀悦前漢紀』は「焼失一帙五本三十卷」と記録されている。静嘉堂本はこのような事情を反映させた形式の蔵書目録となっていた。

このような特徴を持つ静嘉堂本であるが、一方で脱落・誤字等のミスや、異体字や過度な省略が目立つ。例えば貞享四（一六八七）年に刊行された那波木庵『老圃堂集』を『充圃堂』と表記する類のミスである。他にも『昇録』（『鼎録』を『日折録』と誤記、『王季重九種』のうち『避園擬存』が脱落、明の李拭撰『歷代小史』に収められた『良嶽記』を『退岳録』と表記するなどの誤りを確認できる。これらは平戸本では見られない誤りである。同じく『歷代小史』に収録された『松漠記聞』を『松』とだけ書いているケースもある。なお平戸本では『松漠紀聞』となっている。

前付には「尾台蔵書」の蔵書印が押されている。これにより旧蔵者は尾台榕堂（一七九九〜一八七二）であることがわかる。

尾台榕堂は幕末の人。尾台浅岳のもとで古方医学を修め、後に尾台家を継いだ人物である。吉益東洞（一七〇二〜一七七三）に深く傾倒して当時より名医として知られていた。また儒学を亀田鵬斎（一七五二〜一八二六）の後嗣である亀田綾瀬（一七七八〜一八五三）に学んでおり、全体としては折衷学の流れを汲んだ朱子学系であるが、古方医学の習得を通じて古学や徂徠学にも親しんでいたと推測される。榕堂の文集である『学思齋存稿』⁶には『護園蔵書目録』に関する記述を確認することができなかったが、しかしやはり徂徠への特別な敬意はあったようで、「予徂徠先生の書を覽る毎に、其の骨気俊抜にして、神韻迺上なることに歎ず」「先生の書に於けるは、固より十天縦の才に由ると雖も、抑ふに亦た博学、参稽の致す所なるか。本邦に在りては、当に古今第一手と称すべし」（「書富永氏所蔵徂徠先生真蹟後」『学思齋存稿』卷一）と徂徠の書について称賛を惜しまない。

榕堂は漢詩でも評価された人物だが、その詩論を見ると徂徠学に近い理解をしていることがわかる。「然りと雖も、上は則ち盛唐諸家の集を以て師と為し、其の氣象を法範し、其の声調を翫味す。下は則ち『魏氏玉屑』『胡氏詩叢』（注）『詩藪』『滄浪詩話』等の書を以て友と為し、参伍考究し、猶ほ身を千歳の上に置きて、親しく其の指揮を受くれば、復た何ぞ師友の無きことを憂えん」（「復関長温」『学思齋存稿』卷二）と徂徠学派と見紛うばかりの論調である。このあたりにも『護園蔵書目録』を所蔵した理由があるのかもしれないと推測するに留める。

また静嘉堂本の末尾には宇佐美瀧水（一七一〇〜一七七六）の『物夫子著述書目補記』（以下『補記』）が書き写されている点にも注目しておきたい。徂徠の著述目録としては、徂徠の『中庸解』にも附された服部南郭の『物夫子著述書目記』（宝暦三（一七五三）年成立。『南郭先生文集』（四編卷之六）にもあり）があるが、これから漏れたものや

後に刊行したものを宇佐美瀧水が書き留めたものが『補記』である。成立時期は明記されていないが『補記』に「余又著『絶句解考証』三卷『絶句解拾遺考証』三卷、已刊行」とあることから、『絶句解考証』が刊行された安永五（一七七六）年以降と推測される（『絶句解拾遺考証』は明和七（一七七〇）年）。安永五年は瀧水が没した年であるから、『補記』成立時期は一七七六年頃として良いだろう。推測に過ぎないが、もともと原本にあったというよりは、何者が静嘉堂本を書き写す際に参考として一緒に書き足したのではないだろうか。この『補記』は今日ほとんど伝存しておらず、広く流通したものととは考えにくい。⁽⁷⁾『補記』を入手して書き写した、あるいは書き足した人物は徂徠学との関係が深いものと推察される。

(二) 平戸本の特徴

次に平戸本の特徴を挙げていく。外題は「護園蔵書目録」。記録された書物はおよそ一一三一点。平戸藩の第九代藩主、松浦静山が所蔵したものである。好学の大名であり、随筆集『甲子夜話』の著者としても著名である。儒学や漢詩を皆川淇園（一七三四〜一八〇七）や昌平黌の学者たちに学び、佐藤一斎（一七七二〜一八五九）とも交流していた。徂徠学に特別傾倒していたというわけではなさそうだが、その蔵書には徂徠系統の著作も収集されており、フラットに受容していたのだろう。

静嘉堂本では号・番と箱ごとに所蔵した書名と著者名が記載されていたが、平戸本では箱の号・番・著者名がすべて省略され、書名と巻数などだけが記録されている。また目録の前半には漢籍を約八百点、後半には和書を約三百点集めて整理している点でも静嘉堂本とは大きく異なっていた。ほか静嘉堂本に比べると、書き方が丁寧であり、間違いが少ない点も注目される。

静山は『護園蔵書目録』を誰からどのように手に入れたのだろうか。平戸本の奥付にはそれを明らかにする次のような書き入れがある。

是ハ松平甲斐守保明ヨリ借申候其臣

今之荻生総右衛門順卿蔵書目録也

天明六年丙午冬 小白

「小白」は静山の字であることから、この書き込みは静山のものとしてよいだろう。天明六（一七八六）年の時点では、静山は二十六歳。安永四（一七七五）年に家督を相続し、安永八（一七七九）年には藩校である維新館を設立。人材育成に力を入れながら、藩政改革にも邁進していた時期である。

貸し出し主である「松平甲斐守保明」は大和郡山藩三代藩主柳沢保光（一七五三〜一八一七）。保光は初め、諱を安信・保信・保明と名乗ったが、のちに保光に改めたとされる。号は堯山。宝暦三（一七五三）年に生まれ、安永二（一七七三）年に家督を継いでいる。天明六年の時点では三十三歳であった。現在でも政治的手腕だけでなく、和歌や俳諧、茶道に精通していた文化人として知られている。

保光の治世は安永二年から文化八年の三十八年に及ぶが、災害に悩まされた時期が続いたようだ。「安永・天明・寛政にわたる二〇^{（8）}か年間は、災害の一番多い時期」であったとされ、静山が『護園蔵書目録』を借り受けた頃は、天明元年に大風水害、翌天明二年には大風雨・大洪水によって大凶作、天明六年は大雨洪水などが勃発し、天明七年には一揆が起きて^{（9）}いる。それにも関わらず書籍のやり取りをしているのは、歳も近く、同じ好学の大名として静山とも交

流があったということであろう。大名のネットワークを考えるうえでも、貴重な事例である。

「荻生総右衛門順卿」は徂徠から数えて三代目の荻生家当主、荻生鳳鳴（一七五五〜一八〇七）⁽¹⁰⁾を指す。名は天祐、字は順卿。鳳鳴と号した。鳳鳴は小堀遠州の子孫であり、徂徠の娘婿である金谷の養子として小堀家から荻生家に入った。岩橋遵成には「名家の出であったが学業ともに観るに足るものがなかつたやうである」とされる⁽¹¹⁾一方で今中寛司には「守成の人」⁽¹²⁾とも評される。『徂徠先生親類由緒書』を幕府に献上した。また『鳳鳴遺稿』があったとされるが、伝わらない。

この静山の書き込みからいくつか重要なことが判明する。

まず静山が借り出した『護園蔵書目録』は鳳鳴の蔵書目録であったことが明らかとなった。『平戸藩樂歲堂蔵書目録内篇』⁽¹³⁾四巻にも『護園蔵書目』として記載があるが、そこでも「護園荻生茂卿之号 順卿其孫」、「郡山侯臣荻生総右衛門順卿蔵書天明六年丙午求郡山侯写」の書き入れを確認できる。

この時期の荻生家の蔵書がどのような状態であったかは明らかではないが、大和郡山藩の医官であった高橋濟庵（一七六四〜一八三四）の『済庵詩集』巻一（文政十（一八二七）年刊行）⁽¹⁴⁾には次のような五言排律の詩がある。

「寄東都荻生先生」

家世経年遠 家世 経年に遠く

儒名奕葉伝 儒名 奕葉に伝ふ

五車蔵旧帙 五車 旧帙を蔵して

一筐著新篇 一筐 新篇を著す

紙幅の都合で該当箇所のみ挙げた。制作年は不明だが、金谷が一七七六年に没していることもあり、この「荻生先生」は時期的には鳳鳴を指す可能性が高い。「家世」は家柄、「奕葉」は代々の意。「五車」は『莊子』天下篇を典拠とする語で、蔵書の多いことを意味する。荻生徂徠に始まる儒学の名家としての家柄や名声が代々続いていることを言い、同じ文脈で蔵書の多さがうたわれている。このようにうたわれる程度には荻生家は蔵書の家として知られていたのだろう。

成立年にかかわるものとして、平戸本が書写されたのが天明六（一七八六）年であることも重要である。平戸本が伝える蔵書傾向は、この天明六年付近のものということを示唆している。実際、天明五（一七八五）年に刊行されたばかりの、明の高穎が撰し徂徠が点を施した『射学正宗指迷集』（宇佐美瀧水校）が平戸本には記載されている。このことから、平戸本は荻生家の当時最新の蔵書状況を反映していると見てよいだろう。

また平戸本は静山がわざわざ柳沢保光に借りて写したものであることが判明した。静山が他にも書籍目録や蔵書目録を収集していたことは、松浦史料博物館所蔵の『平戸藩楽歳堂蔵書目録内篇』並びに『楽歳堂蔵漢和書目』下巻からうかがうことができる。目録之部には『護園蔵書目録』以外にも『徳山侯蔵典籍簿』、『少納言入道蔵書目』〔注一〕通憲入道書目録』、『足利学校書籍目録』、『郡山侯蔵書目』、『聿修堂蔵書目』、『佐伯侯蔵書目』などの蔵書目録が書籍目録とともに集められており、蔵書への関心をうかがわせる。『護園蔵書目録』を借りたのもそうした知的関心が背景にあつたのだろう。

なお、『平戸藩楽歳堂蔵書目録内篇』の注記によると、静山は『護園蔵書目録』を借りた天明六年に『郡山侯蔵書目』を江戸で写し得ていたようだ。書写したのが「天明六年丙午冬」であり、かつ「求郡山侯写」とあることから、柳沢家の蔵書目録である『郡山侯蔵書目』を書写した際に『護園蔵書目録』を目にした静山が、年内に貸してもらえよ

う頼み込んだのかもしれない。⁽¹⁶⁾

以上から平戸本は由来や成立時期がはっきりしており、信頼のできるテキストだと認定できよう。次節では平戸本を基準に、静嘉堂本の成立年代と成立順とを絞り込んでいく。

三、静嘉堂本の成立年代

(一) 静嘉堂本成立年の推定

静山の書込と『射学正宗指迷集』によって、平戸本並びにその原本の成立時期が天明五年から天明六年の間であることがはっきりとしているのに比べ、前述のとおり静嘉堂本には成立年代をはっきり示すものは残されていない。比較検討に入る前に、まずは蔵書内容の比較検討を通じて、静嘉堂本の成立年代の幅を見極め必要があるだろう。

まず静嘉堂本の成立年代を考察する。記載された蔵書すべての輸入年、あるいは刊行年を特定できればある程度判定が可能であるが、ここでは『韓文公論語筆解』に注目することである程度の幅を見極めていくこととしたい。

この『韓文公論語筆解』は、荻生金谷や大内熊耳（一六九七〜一七七六）に徂徠学を学び、一八世紀末頃には当時の徂徠学者を代表する儒者へと成長した伊東藍田（一七三四〜一八〇九）⁽¹⁷⁾の刊行物である。この藍田が明和八（一七七一）年に刊行した『韓文公論語筆解』が収められていることから、静嘉堂本は少なくとも一七七一年以降の成立と考えられる。韓愈による『論語』の注釈書は『論語筆解』と『韓文公論語筆解』の二冊が静嘉堂本では確認できるが、二つは同じものではない。『韓文公論語筆解』は藍田が『論語筆解』の「真本」として刊行したものであり、それまでは当時においても稀少な書籍であった。

『韓文公論語筆解』は宝暦十一（一七六一）年の序を持ち、明和八（二七七二）年に刊行された。経緯を記した「校刻韓文公論語筆解序」には「吾が友林以寧が家に朝鮮活版の本有り。題して韓文公論語筆解と曰ふ。見行の諸本に方ふれば尤も備れりと為す。且つ集中に経を説けると合ふ者多く有り。豈に真本に非ずや⁽¹⁸⁾」とある。藍田はそれまで知られていた諸本と比べ、これこそが「真本」であると断言している。

もちろん荻生家が刊行以前に『論語筆解』の「朝鮮活版」を入手していることも考えられるが、可能性は低いだらう。『論語』『孟子』『孝経』に関する藍田の考えを知ることができる『藍田先生講義』（寛政六（一七九四）年刊）には、『論語』公冶長第五「子路有聞、未之能行、唯恐有聞」についての講義も収められているが、その中に次のような記述がある。

聞は去声。余嘗て韓文公筆解の真本を得るに、此の章解有り。曰く、「子路行行。而るに聞く所有りて、豈に之れを能く行はざらんや。聞は声聞の聞。子路名の行ひに浮くことを恥ぢ、故に徒らに声聞有ることを恐る」と。子路の心を獲たりと謂ふべし。惜ひかな。徂徠先生。筆解を取ると雖も、然れども真本を得て之れを看ず。故に『徴』此の説を缺く。⁽¹⁹⁾

何晏『論語集解』、朱子『論語集注』、伊藤仁斎『論語古義』を参照・批判しながら、徂徠が古文辞学を駆使して作り上げた『論語』の注釈書が『論語徴』である。藍田は博覧強記で知られた徂徠ですら『論語筆解』の「真本」を見ることができなかつたため、『論語徴』で採用されなかつたと述べるように、自身が刊行した『韓文公論語筆解』の希少性に大きな自信を持っていたことがうかがえるだろう。

仮に荻生家が『韓文公論語筆解』を所持していたとすれば、金谷に学んでいた藍田がそれを知らないはずがなく、「林以寧」の名を出す必要もない。そのため「韓文公」の名前を冠した『論語筆解』が収録されているということから、静嘉堂本の成立は一七七一年以降であるとひとまず判断できる。なお平戸本では『論語筆解』にまとめられてしまったのか、「韓文公」の名前を確認できない。

(二) 成立順

『韓文公論語筆解』の存在により、静嘉堂本の成立は明和八（一七七一）年以降だと推測できるが、平戸本より後の成立ではないことも指摘しておかねば片手落ちだろう。そのためには静嘉堂本（もしくはその原本）が先に成立し、その後にそれらを下地とした平戸本（もしくはその原本）が成立したことの論証が必要である。

まず単純に、静嘉堂本に比べて平戸本の蔵書数が増えている点が根拠として挙げられる。静嘉堂本はおよそ九三四点を蔵しているのに比べ、平戸本はおよそ一一三一点である。中には静嘉堂本にのみ書名が見えるものもあるが、静嘉堂本記載の書籍をほとんど含みつつ、且つおよそ二百点ほど新しく増加していることは、平戸本が静嘉堂本を下地にしていることの大きな根拠となるだろう。

平戸本が静嘉堂本を下地に行っていると考えられるもう一つの根拠として、静嘉堂本の記載順が、再構成された平戸本にも踏襲されている点が挙げられる。静嘉堂本と平戸本は、蔵書内容については『陳眉公秘笈』（『宝顔堂秘笈』²⁰）、『漢魏叢書』などの大部の叢書はもとより、共通する書籍が多く存在するが、並べ方には大きく手が加えられていた。前述したように静嘉堂本は箱ごとの内容が記載されているが、平戸本はそれを再構成し、漢籍を先に、和書を後ろに集中させてある。踏襲された例として次の事例に注目したい。

表2を見ると、通し番号五〇八番（『尺牘双魚』）までは平戸本と静嘉堂本もほとんど同じ配列であるが、静嘉堂本では六八〇番にあたる『唐詩品彙』が平戸本では『尺牘双魚』の次に記載され、その後またしばらく同じ順で書名が続いていることがわかる。ではなぜ平戸本では『尺牘双魚』から『唐詩品彙』へと続くことになったのだろうか。静嘉堂本を確認すると、この五〇八番は書籍で換算すると第三十六号が終わるところ、六八〇番は第四十一号が始まる場所であり、平戸本は静嘉堂本の第三十七号から第四十号に収められた書籍がちょうど抜けた形になっていることがわかる。第三十八号のみ『詩人玉屑』『詩林広記』等の漢籍が入った書籍であるが、飛ばされた第三十七号から第四十号は『大系図』『旧事記』『古事記』、そして徂徠や金谷の著作など、和書が集められた箱であることが関係するだろう。つまり平戸本は静嘉堂本の第三十七号から第四十号に該当する和書を箱ごとにまとめて後ろにまわし、第四十一号の漢籍が先になるように編集されていたことがわかる。そのため平戸本は静嘉堂本と大きく配列を異にしつつも、並べ

平戸本 通し番号	静嘉堂本 通し番号	書名
500	500	七書講義
501	501	武経開宗
502	502	孫子集注
503	503	武経説約
504	504	鶴林玉露
505	505	焦氏筆乘
506	506	詩学大成
507	507	懲鋳録
508	508	尺牘双魚
509	680	唐詩品彙
510	681	歷朝詩家
511	682	杜詩分類
512	683	徐文長集
		袁中即七集
513	684	瀟碧堂集
514	685	錦帆集
515	686	徹篋集
516	687	瓶花齋集
517	688	広荘
518	689	解脱集
519	690	瓶史
		弇州史料
520	691	前集
521	692	後集
522	693	巡幸考
523	694	親征考
524	695	命将征討考
525	696	功賞考
526	697	京営兵将考
527	698	科挙考
528	699	中官考
529	700	旧丞相府志
530	701	後旧丞相府志

方のレベルではあくまで静嘉堂本の箱ごとの配列が保存されており、このことから静嘉堂本が平戸本の下地として活用されたことが推測できるのではないだろうか。和書の並び順に関しては例外も多いが、大局的に見れば、新しく凡例を作つてすべてを一から配列しなおしたのではないことは確かだろう。

以上の検討から平戸本は静嘉堂本を下地として作成され、明和八（一七七二）年以降に成立した静嘉堂本と、天明六年に成立した平戸本の間には最大でおよそ十五年の間隔があることが明らかとなった。二つの『護園藏書目録』が一八世紀末時点の荻生家の蔵書内容を伝えているとすれば、荻生家の蔵書はこの間どのような成長を遂げたのだろうか。最後に比較検討を通じて、その蔵書変遷の内実について考察を進める。

四、蔵書変遷とその意味

静嘉堂本と平戸本の比較検討は多角的に行う必要があるが、本稿では徂徠学派関連の書籍が具体的にどのような変遷を遂げたのかに焦点をあて、論を進めていく。

最初に荻生徂徠の著述が平戸本になって大幅に増加した点に注目する。まずは静嘉堂本に記録された徂徠そして金谷の著述の一覧（表3）を見てみよう。

第四十号は内容から徂徠・金谷の書籍を主に集めた箱と考えられる。ただし一部徂徠・金谷以外の書物が入っている。残りは第四十八番に入れておかれたことは静嘉堂本から読

表③ 静嘉堂本(徂徠・金谷関係)						
号	書名	著者	号	書名	著者	
四十号	素書国字解稿	徂徠	四十号	杜律譜草	金谷	
	孫子国字解稿	徂徠		読易草	金谷	
	風流使者記	徂徠		入易門庭	金谷	
	呉子国字解未成稿	徂徠		近思録序考	金谷	
	又	徂徠		洪範筮法	金谷	
	武田系図	徂徠?		読易雑抄	金谷	
	訳文筌蹄	徂徠		膳炊書	金谷	
	又	徂徠		灸瘡方	金谷	
	又葉草	不明		藥物斤両	金谷	
	楽律考証	金谷		読遼史	金谷	
	文戒	徂徠		読野語	金谷	
	文集	徂徠?		漢儒伝経図	金谷	
	峡中紀行	徂徠		異邦服制	金谷	
	峡游吟	徂徠?		管子疑義	金谷	
	華陽紀事	徂徠		弇州疑義	金谷	
	文野	徂徠		滄溟疑義	金谷	
	雑集	徂徠?		琉球使者記	金谷?	
	外書	徂徠?		明律疑義	金谷	
	護園隨筆	徂徠		三国記	不明	
	忘憂館課	徂徠? 金谷?		北畠系図	不明	
	文稿	徂徠? 金谷?		用字格	東涯(参考)	
	紫芝社稿	徂徠? 金谷?		[中略]		
	丙前稿	徂徠? 金谷?		唐詩典刑	徂徠	
	呉門稿	徂徠? 金谷?		四十七号	六諭衍義	室鳩巢 徂徠
	有時而昏	徂徠? 金谷?		四十八号	徂徠詩文集	徂徠
	文理三昧	金谷			訳文筌蹄	徂徠
	雑著	金谷?			問槎二種	徂徠学派
	丹侯問劉	金谷?			護園隨筆	徂徠
儒解	金谷					
書十一篇旁訓	金谷?					
鶯論愚得解	金谷					
博愛心鑑序解	金谷					
三器考草	金谷					
漢官図譜	金谷					
国語校草	金谷					
管子校草	金谷					
二十一史筆抄	金谷					

み取ることができる。しかし徂徠の著作については『素書国字解稿』『孫子国字解稿』『呉子国字解未成稿』といった兵学書の注釈の稿本や、『唐詩典刑』のようなごく初期の詩選集、甲府の見聞録である『風流使者記』といった紀行文、『訳文筌蹄』『問槎二種』『護園隨筆』等の初期から中期にかけての著作は収められているものの、『弁道』（享保二（一七一七）年刊）や『弁名』（享保二（一七一七）年刊）、『鈴録』（享保十二（一七二七）年自序）、『論語徴』（元文二（一七三七）年刊）などの主著を見ることは出来ない。静嘉堂本が成立したと推定される時期にはすでに刊行されており、徂徠存命時には少なくとも竹溪による書写の形では荻生家には存していたことは『護園雑話』からも読み取ることができる。

竹溪は徂翁の著述ものを多く写せり。浪人のころ筆耕料をとつて書たり。護園に今存せる『二弁』（注―『弁道』『弁名』のこと）『学庸解』（注―『大学解』『中庸解』のこと）『鈴録』『論語徴』など、皆竹溪の書なり。詩文は大分、竹溪に書せしことありしとぞ。『鈴録』は十五日の間に全部皆写をはりしとなり。徂翁常に申さるゝには、「竹溪は至て頓筆にて、謄写速に、その上、脱落・誤字等もせぬ」とて、多竹溪にかゝせられしが、『鈴録』には驚かれしとなり。⁽²¹⁾

時の政治問題を語る『政談』のような、特殊な事情をもつ書籍が荻生家に残されていないことは理解できるが、他の主著が刊本・写本、草稿の形でも荻生家に残っていない点は不審である。本当に持っていないのか、何らかの理由で失われたのか、あるいは徂徠の主著は『護園蔵書目録』に記載された蔵書とは別の形で保管されており、反映されなかった可能性が挙げられよう。少なくとも静嘉堂本の時期に記載しなかった何らかの積極的、あるいは消極的な

二つの『護園蔵書目録』（吉川）

表④ 平戸本(徂徠・金谷関係)							
	静嘉堂本	書名	著者	静嘉堂本	書名	著者	
1	○	唐詩典刑	徂徠	51	○	文集	徂徠詩文集？
2	○	画史韻目	徂徠？	52		度量考	徂徠
3	○	華陽紀事	徂徠	53		絶句解	徂徠
4	○	風流使者記	徂徠	54		答問書	徂徠
5	○	忘憂館課	徂徠？	55	○	孫子国字解	徂徠
6	○	文稿	徂徠？	56		絶句解拾遺	徂徠
7	○	映中紀行	徂徠	57	○	訳文奎蹄	徂徠
8	○	峡游吟	徂徠？金谷？	58	○	護園隨筆	徂徠
9	○	紫芝社稿	徂徠？金谷？	59	○	文部	徂徠
10	○	丙前稿	徂徠？金谷？	60	○	呉子国字解未成稿	徂徠
11	○	呉門稿	徂徠？金谷？	61		読荀子	徂徠
12	○	有時而昏	徂徠？金谷？	62		読韓非子	徂徠
13	○	文理三昧	金谷	63		読呂氏	徂徠
14	○	儒解	金谷	64		古文矩	徂徠
15	○	書十一篇旁訓	金谷	65		明二直隸十三省考定図	徂徠
16	○	魯論愚得解	金谷	66		唐後詩十集	徂徠
17	○	博愛心鑑序解	金谷	67		四家尚	徂徠
18	○	漢官図譜	金谷	68		明律国字解	徂徠
19	○	国語校草	金谷	69		樂制篇	徂徠
20	○	管子校草	金谷	70	○	楽律考	徂徠
21	○	杜律講草	金谷	71		鈐録	徂徠
22	○	読易草	金谷	72	○	琉球聘使記	徂徠
23	○	三器考草	金谷	73		幽蘭譜抄	徂徠
24	○	管子疑義	金谷	74		琴学大意抄	徂徠
25	○	滄溟疑義	金谷	75		文妾	徂徠
26	○	弁州疑義	金谷	76		韻概	徂徠
27	○	明律疑義	金谷	77		滴文考	徂徠
28	○	二十一史筆抄	金谷	78		葬礼略	徂徠
29	○	入易門庭	金谷	79		詩題苑	徂徠
30	○	近思録序考	金谷	80		南留別志	徂徠
31	○	洪範筮法	金谷	81		広象棋譜	徂徠
32	○	読易雜抄	金谷	82	○	素書国字解	徂徠
33	○	膳炊書	金谷	83		護園十筆	徂徠
34	○	疾瘡方	金谷	84		学則	徂徠
35	○	藥物斤両	金谷			[一行空け]	
36	○	読遼史	金谷	85		憲廟実録	徂徠
37	○	読野語	金谷	86		太平策	徂徠
38	○	漢儒伝経図	金谷	87		政談	徂徠
39	○	武田系図	金谷？			[一行空け]	
40	○	北畠系図	金谷？	88	○	六論衍義	徂徠
41	○	異邦服制	金谷	89		文命隄碑(堤碑)	徂徠
42		朝鮮來朝記	徂徠？金谷？			[一行空け]	
43		人物志略	徂徠？金谷？	90		素門評	徂徠
44		浪合記	徂徠？金谷？				
45		難風記	徂徠？金谷？				
		[改頁]					
46		弁道	徂徠				
47		弁名	徂徠				
48		論語微	徂徠				
49		大学解	徂徠				
50		中庸解	徂徠				

理由があるはずだが、それ以上のことは新しい資料の出現を待ちたい。
一方で平戸本は表4の通りである。

比較すると、静嘉堂本に記載されなかった徂徠の主著の大部分を平戸本では確認することができた。特に『弁道』から始まる徂徠の主著のリストについては、丁を新たにしておそれと差別化を図っているようだ。さらに『政談』など公儀に関わる書籍群は一行空けて記載されている。これは静嘉堂本が『六論衍義』を書き記した際には見られなかった配慮である。『太平策』のような偽書の疑いのある著述も『政談』の隣に記載されていることから、『太平策』も徂徠の著作として荻生家に公認されていたことがわかるだろう。この時期に徂徠の著作を大量に盛り込んだことは、何らかの意図が働いていたはずである。ここでは増加の事実だけを指摘し、検討は後に譲りたい。

また、平戸本では徂徠の高弟たちの著作・詩集も大幅に増加した。増加分をリスト化したのが表5である。

正確に述べるならば、静嘉堂本には徂徠の高弟たちの著作は記載されておらず、平戸本になってはじめて盛り込まれた。これら高弟たちの著作は平戸本の最後尾にまとめて記載されている。徂徠と同様に、静嘉堂本が成立した時期にはこれら高弟の詩文集や著作はすでに刊行されているにも関わらず、荻生家がそれらを所持していなかったという点は不審である。

	書名	著者
1	菴園録稿	宇佐美瀧水 編
2	名公四序	田元俊卿 編
3	唐詩選	李攀竜
4	滄溟尺牘	李攀竜 田中磨陵 校訂
5	文則	服部南郭?
6	詩筌	鷹見爽鳩 編
7	弁州明詩評	王世貞 滝鶴台 点
8	烟草譜	陳琮 撰?
9	南郭集	服部南郭
10	東野遺稿	安藤東野
11	周南集	山泉周南
12	紫芝園前後稿	太宰春台
13	金華集	平野金華
14	蘭亭集	高野蘭亭
15	滄浪集	入江南溟
16	親族正名	太宰春台
17	和號要領	太宰春台
18	聖学問答	太宰春台
19	六経略説	太宰春台
20	弁道書	太宰春台
21	斥非	太宰春台
22	郭注荘子	南郭校訂
23	古文孝経	太宰春台
24	再刻古文孝経序略解	太宰春台
25	作文初問	山泉周南
26	灯下書	服部南郭
27	文筌小言	服部南郭
28	論語古訓	太宰春台
29	古訓正文	太宰春台
30	古訓外伝	太宰春台
31	新刻蒙求	服部南郭
32	王注老子	服部南郭
33	墨子全書	?
34	泉志	?
35	和夷通商考	?
36	普濟碑	?
37	禹稷碑	莊田子謙
38	明医小史	望月三英
39	輔儲篇	宇佐美瀧水
40	詩書小序	宇佐美瀧水
41	訓点千字文	宇佐美瀧水?
42	百体千字文	?
43	家語正印	?
44	唐官品図	伊藤東涯
45	明官品図	伊藤東涯?
46	七才子集註解	陳繼儒、李士安
47	荘子註疏	郭象注
		了

安藤東野（一六八三～一七一九）、山県周南（一六八七～一七五二）、服部南郭（一六八三～一七五九）、平野金華（一六八八～一七三二）、高野蘭亭（一七〇四～一七五七）、太宰春台（一六八〇～一七四七）といった特に名前の通った弟子たちの詩文集に交じって、『滄浪集』が入っているのが目を引く。一般に『滄浪集』といえば宋の嚴羽が想起されるが、ここでは入江南溟（一六八二～一七六九）の『南溟詩集』（『滄浪居文集』）だと考えられる。春台や南郭と比較すれば、現在それほど知られていない徂徠学者であるが、入江南溟もまた徂徠の高弟として認知されていたのだろう。世代としては南郭らとほぼ同じ時代を生きており、松崎観海（一七二五～一七七六）や大内熊耳、伊東藍田の一つ上の世代の徂徠学者である。

高弟たちの詩文集の後に太宰春台と服部南郭の代表的な著作が記載され、その後に莊田子謙（一六九七～一七五四）・望月三英（一六九七～一七六九）・宇佐美瀧水といった徂徠の孫弟子たち、特に南郭の弟子たちの著作が続く形である。

以上、明和八（一七七一）年以降に成立した静嘉堂本から、天明六（一七八六）年頃に成立した平戸本への間で、徂徠の名著や徂徠の高弟たちの著作が大幅に増加した事実を確認することができた。この事実は一体何を物語るのだろうか。この最大で十五年間の中で、なぜ徂徠の名著や徂徠の高弟たちの著作を今更収集、もしくは蔵書目録に新たに記載しようとしたのか。これに答えられる具体的な資料を持たないが、当時の荻生家やその周辺の徂徠学派の状況を重ね合わせると、一つの仮説を提示することができる。

かつて今中寛司は宝暦から天明期の徂徠学派の動きを以下のように述べていた。

宝暦・明和・安永・天明のころ、すなわち十八世紀後半のころの護園は、金谷・鳳鳴の時代である。その下に伊

藤藍田⁽¹⁾（高崎藩儒）、その師大内熊耳（唐津藩儒）、中根東平（高遠藩儒）、宇佐美瀧水（松江藩儒）らが、旗本格の「社中」として、家元に奉仕した。家元の護園の羽翼としては、南郭の創めた芙蓉館、春台の開いた紫芝園があつたわけである。

しかし南郭・春台は、すでにそれぞれ宝暦・延享のころに没し、両者の「社中」はその弟子達の時代で、護園一派の勢力も、このころから、三都に群集する諸社中の一つにしかすぎない情勢であつた。⁽²²⁾

一般に徂徠が提唱した徂徠学は経学派と詩文派に二分して継承されたとされる。江村北海（一七一三〜一七八八）は『日本詩史』で「蓋し徂徠没して後、物門の学、分かれて二と為る。経業は春台を推し、詩文は南郭を推す」⁽²³⁾としていた。この二人の没後、「護園」の存在感が低下するのはやむを得ないところだろう。春台と南郭が生きている間、金谷は二人をいつも立てていたようだ。樋口徳翁は『日本名家人名詳伝』（一八九四年）で次のように金谷を紹介している。⁽²⁴⁾

名は道渚。字は大寧。金谷と号す。通称伊三郎、後に惣右衛門と更む。徂徠の義子。柳沢侯に仕ふ。よく家学を継述す。其平生退讓自ら行ひ競ふことを好まず。故に当時の護社の高弟の文鋒を避て葆光し、門に到着あれば経義は春台へ問ひ玉ふべし、文章は南郭へ問ひ玉ふべしとて自ら名子の子と云ふを以て居らず。故に人々却て其学を知人少し。然も文章歌詩実到家声⁽²⁴⁾を落さず。

金谷の人となりは「退讓」、今中の言葉を借りれば「全く守成の人」⁽²⁵⁾の一言で表すことができるだろう。徂徠の後継と

して私塾「護園」をリードしていくよりも、伊東藍田をはじめとする何人かの弟子を育てながらあまり目立たずに過ごし、二人の高弟を頭に頂いて家声を落とさないように努めていたのだろう。この点については当時の評判記も似たような様子を伝えている。

『三都学士評林』明和五（一七六八）年刊⁽²⁶⁾

太夫本之部

総巻軸
大上上吉 荻生宗右衛門

頭取

学問の噂ハともあれ親玉の株なれハ金谷先生ノ〜と尊ひます。

『儒医評林』明和九（一七七二）年刊⁽²⁷⁾

経学家之部

巻軸
功上上吉 荻生総右衛門

名道済字
太宰号金谷

頭取

学問のうわさハともかくも親玉の跡なれハ巻軸に致しました。

目立った「学問の噂」は聞かないが、あの荻生徂徠の後継者なので、「金谷先生ノ〜」と高く持ち上げられている雰囲気は伝わってくる。とはいえ春台・南郭が没し、「護園」の存在感が下火になっても、なお力のある弟子たちが各地で徂徠学を盛り上げるべくそれぞれの活動を続けていた。特に瀧水は徂徠の著作を多数校訂・刊行するなど、徂徠学普及に大きく寄与したはずである。このころの評判記をみると、評判記の上位の学者は徂徠の孫弟子、春台や南郭

の愛弟子たち達が幅をきかせており、確かな実力と人気を兼ね備えていたことがよくわかる。そのため金谷が「退讓」な人柄だとしても、上手くいっていたのだろう。

しかし安永五（一七七六）年、「護園」として大きく弱体化する事件が立て続けに起きた。徂徠や春台、南郭らの愛弟子として徂徠学派や「護園」を牽引してきた四人の学者、大内熊耳（二六九七〜一七七六）、荻生金谷（一七〇三〜一七七六）、宇佐美瀧水（二七一〇〜一七七六）、松崎觀海（一七二五〜一七七六）らが一斉に亡くなったのである。弟子たちがこの事態にどのように対処したのかは今後の課題としたいが、安永五年は徂徠没後の徂徠学派を考えるうえで、そして「護園」を語るうえで一つの大きな転換期になり得るだろう。この頃から、徂徠学は思想・文学の面で激的な批判を受け、徂徠学派は表舞台からは退場していくが、思想闘争や時代的要請という抽象的な次元とは別に、一斉に有力者を失ってしまったことも理由の一つとしてあるのではないか。

こうした中で小堀家から養子として荻生家に入り、若干二十一歳で荻生家を継ぐことになった鳳鳴は、大和郡山藩に藩儒として仕えながら、頼れる先人もいない中で、護園の再建に取り組む必要があったと考えられる。その一環として、かつて黄金時代を築いた徂徠や徂徠の高弟たちの著作の収集活動があり、それが平戸本のもととなる新しい『護園蔵書目録』の作成につながったのではないだろうか。

五、おわりに

本稿ではこれまでほとんど研究利用されてこなかった静嘉堂所蔵の『護園蔵書目録』と、新たに発見された松浦史料博物館所蔵の『護園蔵書目録』との比較検討を通じて、それぞれの特徴と成立年代、成立順の簡単な整理を行い、

そのうえで荻生家の蔵書変遷の実態の一部を明らかにした。平戸本が見つかったことよって、静嘉堂本の資料的価値はより確かなものになったと言えるだろう。

その中で、研究史でこれまでほとんど取り上げられてこなかった荻生家三代目当主、荻生鳳鳴の動向に関して、新しい知見を提供することができた。『徂徠先生親類由緒書』を除けば鳳鳴の著述は今日見ることができず、本来ならば研究対象に据えることすら難しい人物である。静山の書込によつて『護園蔵書目録』への鳳鳴の関与が確実となった今、この蔵書目録の分析を通じて鳳鳴の動向を垣間見ることが可能となった。

今後は、静嘉堂本・平戸本の翻刻を含めたより詳細な調査と、安永五年前後の徂徠学者たちの動きをより実証的に解き明かしていく作業が課題として残されている。特に鳳鳴に関しては資料がほとんど残されていないため、周辺の学者・文人の詩文集にあたっていく必要がある。紙幅の都合で紹介できなかったが、明律に関する書籍も平戸本では増加しており、鳳鳴の関心の一端をうかがうことができる。鳳鳴が仕えた柳沢保光の動向や保光の日記『虚白堂年録』にも目を配りながら、徂徠の思想の行く末を追いかけていくことも同時並行で進めなければならない。その作業を一つ一つ積み重ねることで、一八世紀末の思想動向を、徂徠学者の動向や関心事を通じて描き出していくつもりである。

凡例

- ・ 引用資料は基本的に新字体に改めた。
- ・ 漢文の書き下しは基本的には刊本に従ったが、一部私に書き下したものがある。

〔注〕

- (1) 『護園雑話』九一頁(『護園雑話』は『続日本随筆大成』巻四(吉川弘文館、一九七九年)のものを使用。)
- (2) 去る二〇一六年は徂徠の生誕三五〇年にあたり、『思想』一一二二号では荻生徂徠の特集(荻生徂徠―「差異」と「共存」―)が組まれるなど、徂徠をめぐる研究状況は今なお活況である。多くの参照すべき研究があるが、ここでは最新の研究史整理として高山大毅(二一世紀の徂徠学)、『思想』一一二二号、二〇一六年)や、同『近世日本の「礼楽」と「修辭」——荻生徂徠以後の「接人」の制度構想——』東京大学出版会、二〇一六年)等の一連の論考を参照されたい。
- (3) 詳細は「シリーズ(本の文化史)刊行にあたって」(横田冬彦編『読書と読者(本の文化史1)』平凡社、二〇一五年)、若尾政希「書物・メディアと社会」(島菌進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『書物・メディアと社会(シリーズ日本人と宗教)』春秋社、二〇一五年)を参照されたい。
- (4) 荻生家の蔵書目録として、ほか『徂徠先生蔵書目録』(早稲田大学図書館服部文庫所蔵)がある。しかしこれは「物子書示木公達書目」とほぼ同一の内容であるため、本稿では特に取り上げない。
- (5) 『護園雑話』九二頁(同上)
- (6) 『学思齋存稿』は『学思齋存稿』(オリエント出版社、一九九七年)を使用。
- (7) 管見の限り、『物夫子著述書目補記』は静嘉堂本のほか、関西大学泊園書院が所蔵する『泊園図書目録』の付録という形で確認できる。また『瀟水叢書』「雑著」(東京大学史料編纂所所蔵)に近い目録があるが、同じものではない。
- (8) 柳沢文庫専門委員会編『大和郡山市史』二七一頁(大和郡山市、一九六六年)

- (9) 柳沢文庫専門委員会編『大和郡山市史』二七一頁（同上）
- (10) 今中寛司『徂徠学の史的研究』三七五頁（思文閣、一九九二年）
- (11) 岩橋遵成『徂徠研究』四八七頁（関書院、一九三四年）
- (12) 今中寛司『徂徠学の史的的研究』三七五頁（同上）
- (13) 松浦史料博物館所蔵『平戸藩楽歳堂蔵書目録内篇』（請求番号…古文書 VII—1（イ）4の4）
- (14) 高橋濟庵『濟庵詩集』は奈良女子大学学術情報センター所蔵本を使用。
- (15) 松浦史料博物館所蔵『楽歳堂蔵漢和書目』（請求番号…古文書 VII—1（イ）5の7）。目録之部にはほか『群書一覽』『本朝書籍目録』『日本書籍考』『日本書籍目録』『倭板書籍考』『合類書籍目録大全』『和漢軍書要覽』『歴代記録』など、これまでどのような書籍が日本にあったのかを示す和書目録（書籍目録）も記載されている。
- (16) 念のため柳沢文庫編『柳沢文庫収蔵品仮目録』（大和郡山市、一九七三年）を確認したが、『護園蔵書目録』は現在の段階では含まれていなかった。
- (17) 詳細は拙稿「伊東藍田と反徂徠学―『作詩志叢』を中心として―」（『日本思想史研究』四四号、二〇一二年）を参照されたい。
- (18) 伊東藍田『韓文公論語筆解』は早稲田大学図書館所蔵本を使用。
- (19) 伊東藍田『藍田先生講義』は長沢規矩也編『日本随筆集成』第七卷（汲古書院、一九七八年）所収のものを使用。

- (20) そもそも荻生家が所蔵していた『陳眉公秘笈』（『宝顔堂秘笈』）は現在知られているものとは大きく内容が異なっているようだ。本来であれば『正集』『続集』『広集』『普集』『彙集』『眉公雜著』の順でまとめられているはずが、静嘉堂本および平戸本ともに『広秘笈』『彙秘笈』『正秘笈』『尚白齋秘笈』『続秘笈』の順となっており、順番が大きく異なるだけでなく、『普集』（『普秘笈』）がどちらにも記載されていない。また『正秘笈』とされる書籍群の内容を確認すると、実際には自身が『眉公雜著』であり、『尚白齋秘笈』とされる書籍群の内容は、本来は『正秘笈』に収録されたものであった。かなり特殊な形態（あるいは誤り）であるが、かえって静嘉堂本と平戸本の連続性を確認できるだろう。さらに『陳眉公広秘笈』に収められている『席上広談』隣には「以上四帙五十一部三十冊百一卷為広秘笈」という書込が両書ともにあるが、静嘉堂本には十七部だけが記載されており、記述と数が合わない。『広秘笈』にあるはずの三十四部は『彙秘笈』に混入してしまっている。一方で平戸本の方ではしっかりと数も合っており、誰かが目次を参考にして修整したことがわかる。このあたりの混乱についての説明は煩雑になるので、また別の機会に論じたい。

- (21) 『護園雑話』八六頁（同上）
- (22) 今中寛司『徂徠学の史的研究』三七六～三七七頁（同上）
- (23) 『日本詩史』九一頁（岩波文庫、一九四一年）
- (24) 樋口徳翁『日本名家人名詳伝』は芳賀登「ほか」編『日本人物情報大系 学芸編一』第四一卷（皓星社、二〇〇〇年）所収のものを使用。
- (25) 今中寛司『徂徠学の史的研究』三七五頁（同上）
- (26) 『三都学士評林』は中野三敏『江戸名物評判集成』（岩波書店、一九八七年）所収のものを使用。

(27) 『儒医評林』は中野三敏『江戸名物評判記集成』（同上）所収のものを使用。

【付記】 本稿は国文学研究資料館 共同研究（若手）「山鹿素行関連文献の基礎的研究」による成果の一部である。

